

お茶うけ 第41話

少年文学集

子供たちは、遊びに夢中になると回りのことが分からなくなります。それで前回のよう
に、「ざしきぼっこ」が現れても、いつ現れたのか気がつきません。

子供たちが夢中に遊んでいるところに不思議なものが現れる話に、豊島與志雄の童
話「天狗笑(てんぐわらい)」があります。「天狗笑」は次のようなお話です。

ある山裾の村の森のはずれの原っぱで、子供たちが丸く輪になって、「にらめっこ」の
遊びをしています。「だるまさん、だるまさん、にらめっこしましょう、わらうとぬかす、1、
2、3、うむ」。みんな息をつめて、両手を膝について、目を見張って、おかしい顔を作っ
て、ほかの者を笑わそうと一生懸命です。1人抜けるたびに、繰り返しながら、だんだ
ん熱中していきます。すると、突然、頭の上で、空の真ん中で、わははははと大きな
笑い声がします。

びっくりして、上を見上げますと、森の上からぬーっと大きな顔がのぞいて、それが
空一杯の大きさになって、家のような大きな眼と鼻と口とで、わはははははと笑ってい
ます。とすぐに、その顔も笑い声も消えてしまって、日の光のきらきらしている青い空
があるばかりです。

ある日子供たちが「にらめっこ」に夢中になっていると、いつの間にか見知らぬ子供が現れて仲間に入ります。その子は、「にら
めっこ」が強く、また鼻を伸ばして踊らせる特技を持っていて、とうとう勝ってしまいます。今度は、鼻を使わないことにして、夢中で
「にらめっこ」をしていると、いつの間にかその子は消えていました。いないことに気づいた子供たちが探そうとしたとき、わははは
ははと笑う顔が空一杯に現れて消えました。

そのうちに、あれは天狗だ、天狗笑だということになりました。

子供のころ「天狗笑」を読んでから、私は小学校の校庭で友達と夢中で遊んでいても、ふと天狗が出てきたら嬉しいなと、空を見上
げたりしましたが、名古屋の町中には天狗は現れませんでした。

今回、「天狗笑」の内容を確かめるために、図書館から『現代日本文学全集 第33編 少年文学集』を借りてきました。私の家にもこ
この本があり、私が小学生で結膜炎を患って眼帯をして寝ていたとき、家にいた叔母がこの中の話を幾つか読んでくれたことを、懐か
しく思い出しました。私の家の本は、戦争中の疎開や戦後の転居を繰り返すうちに無くなってしまいました。

『少年文学集』の著作者代表の鈴木三重吉は、この本の紋の冒頭に、次のような内容のことを格調高く書いています。

『今日の日本の少年文学の運動は、日本人が世界に誇ることができる程に光り輝いている。今の日本のように、多くの同時代の
優れた作家たちが、そろって少年文学を書いている国は、世界中探しても見当たらない。しかもその作品は非常に価値の高いもの
なのである』

執筆者(著作者と翻訳者)とその作品例を上げますと、巖谷小波「こがね丸」、幸田露伴「番茶会談」、森田思軒「十五少年」、若松
賤子「小公子」、小川未明「金の輪」、島崎藤村「子供のため」、北原白秋「童謡」、久保田万太郎「ロビンおぢいさま」、宇野浩二「天
下一の馬」、豊島與志雄「天狗笑」、秋田雨雀「三人の百姓」、芥川龍之介「蜘蛛の糸」、佐藤春夫「蝗の大旅行」、楠山正雄「マッチ
売りの少女」、鈴木三重吉「古事記物語」など、今読んでも一級品が揃っています。これを見れば、鈴木三重吉の序文も納得できま
す。

今では、この本は古本屋でも手に入りにくいようで残念です。

以上

参考資料:

『現代日本文学全集 第33編 少年文学集』 著作者代表鈴木三重吉 改造社刊
昭和3年(1928)3月1日発行 豊島與志雄の「天狗笑」は、この本の P-371 ~ 377 にあります。